

# 幼児期の絵画について

——現状に於ける指導の中より——

大 岡 和 子

## 1. は じ め に

最近、幼児教育の重大さが認識され、大きく問題にされていることは、未だ、かつて、ないことである。幼稚園も数的には増加を示したが、その中には、色とりどりの特色を、看板にして、幼児を集める教育機関が増えてきた。そこには、全く、子どもを忘れ去り、宣伝中心主義、母親の要求中心、特定の領域の指導に、重点を置いたり、知識教育への、高まりの結果、文字や数を、強制的に指導する園も増加している。

一方の現象として、各専門分野の先生を招き、子ども達に、直接指導する園もあり、音楽、体育、絵画などが、非常勤講師でなされ、クラス担任は、助手役となる。

保護者側には、よく教えてくれる園として、人気はあるが、先生側には、問題が残る、保育の場に於ても、困ることが、生じている。

然し一方では、どのように指導することが、幼児の成長に、つながることなのかと、教育の本質を真剣に考え、研究を重ね、努力している園も、増加してきたことも事実である。

表面的には、同じ幼稚園にみえても、内容面に於て、質的に、大変な相違がある。

又、現在の幼児の実態は、どうかと見るとき、体位は向上して、身長、体重は増え、大きい子どもは多いが、体力は乏しい。

遠足で歩けない子ども、荷物の持てない子ども、など、生活行動の面でも、主体性のない甘えっ子、忍耐力のない子どもが多い。

マスコミの影響で、知識は豊富に持ってはいるが、それが身についてないので、バラバラで関係づけができない。

自然に接する機会の少ない都会の子ども達は、昆虫や、植物に対する理解度も、大自然の中での、それら本物の実態を知らないで、人工化された、にせものが、イメージに残るのか作品にそれが現われている。

又現実的なものには、相当要求を持っはいるが、将来の希望とか夢、自分の考えには確固たるものがなく、自信のない、無気力な精神面の虚弱児が多いのではないか。不安定な世相の一端を、見るおもしろいである。

現代社会が多様化した中で、幼児教育界も多様化し、その中で、ゆれ動いている。

教師自身も信念がなく、マスコミの影響にふり廻されて、もがいているのが現状のように思う。

そこには教育制度改革問題や、幼稚園の置かれている社会的地位、環境設備や、物的待遇にも関係があると思うが、今や、幼児教育界が、大切な岐路に立っている時、「本当の教育とは何か」「どう考え指導すべきか」「どんな人間形成を望んでいるのか」「幼稚園は何をすることなのか」など、はっきり目標を決めて、取組まねばならないと考える。

そこには、いつも子どもが、中心に考えられなくてはならない。子供不在にしては、いけない。「子どもとは何か」今更ら、あらためて、こんな素朴な原点に立帰り、幼児の心身の成長に何が一番大切なことなのかを再認識し、正しい教育の立場から考えて、誤りのない指導をせねばならない。

## 2. 創造性をのばす絵画活動とその位置づけ

幼児の生活は凡て遊びであると思う。遊びと一口に言っても、あらゆる方面の働きが、その中に入っていて、大変複雑なものである。

然しここでは、楽しい、面白い、又試めしてみようと思う心身の活動を中心に、遊びを考えたい。

幼稚園で、子どもの顔が生き生きと輝いて、一番楽しそうに見えるのは、我を忘れて遊んでいる時である。次から次へと活動の連続でも、あまり疲れない。自分達で遊ぶ方法を創り出し、仲間づくりが、だんだんと増えて集団となり、お互いのルールの中で楽しんでいる。部屋の中で先生から一斉に指導されている時の顔と、全く違う顔を、そこに発見する。

何故、そんなに楽しいのだろうか。そこには自由がある。何の強制もない。結果を求めない遊びの無償性が、子どもの心を、かきたてて、いるのではないか。

子どもとは、生れながらにして、本能的に、新しいものを造り出す強い欲求を持っている。幼児期のそれら遊びの実態を見ていると、積木遊び、砂場遊び、絵画製作など、構成的で、想像力を刺激する活動に、最も強い興味と、意欲を示してくる。絵を描いたり、物を作ったり、組立てたりする自己表現活動こそ、幼児の基本的欲求であり、これを大人が束縛したり、抑圧することは、幼児の生活をおびやかすことになる。せっかく伸びるべき生命力を萎縮させ健全な精神の成長を、さまたげ、心の病気を、つくることになるのではないか<sup>2)</sup>。

創造力こそは、人間の基本的能力であり、誰でも内部に秘めて持っており、適当な刺激と教育によってこそ、引き出し育てることが、できるのである。絵画製作は、子どもの創造的エネルギーを開発するのに、最も効果的であり、本能的であると考え。自由に、のびのびと自分の考えや、感情を表現した時に、心の内面は作品として外に現われ、個性的な自分が生れてくるのではないか。

幼児期に於て、他人の力に、たよったり、模倣するのでなく、主体的に問題に取組み、解決していく基本的能力を、身につける事が大切である。ここに創造へのよろこびと、自信が生れ、色々の問題に対して、自主的に対応する主体的、創造的な人間が育成されるのではないか。ここで幼児期の絵画指導の在り方が大切な問題となってくる。が一方学校教育に於ける芸

術教育の位置は、どうだったかと考える時に、井島勉氏は<sup>3)</sup>「それは決して高いものでなかった。むしろ、はなはだ軽視されていたのが実状である。それは芸術及び芸術教育の真義が誤解されていたことに基づく。芸術と現実生活とは、分離されたものとして、考えられ、娯楽や慰安と、混同されるのが常であった。そして知育中心の教育計画にあって、芸術関係の科目は、その周辺的位置に置かれてきている。

芸術が特殊の才能の作業であったり、知性や意志から分離されたものではなく、たとえそれが直観や感情をもって、特色づけられるにしても、全人間的な生の一つの実現方式なのである。それは知と意から分離した情の営みと云うよりも、知と意と情とが、そこから由来する。情操は単に、英知と意志に対立する一つの領域ではなく、むしろ、それらの前段階的な位置を占めているのである。今や、知育、徳育と並んで、いや、それ以上に教育の根底的、中核的な分野でなくてはいけない」と、その重要性が述べられ、あくまでも芸術教育は人間そのものの開発であり、自由な人間的自覚の表現を目標とすべきである。そこに創造的な人間が育成されていくことを力説している。

### 3. 教える教育と育てる教育・可能性を伸ばす心の教育

幼稚園の過去の保育に於ては、如何に上手に描き、実物通りであるかと、技能を中心に末梢的な指導に重点を置き、教え込む方向がとられていた。子ども自身から生れる、いたずら描き、ぬたくり、など、内からの欲求を強力に押しつぶし、芽を止め、その代り常識をつめ込むことが教育だと考えていた<sup>4)</sup>。そこで、チューリップ、家はこう描くものと、模倣させて、子どもの心が働いていない、手先だけの概念画が多く出た。現在でも、その名残が見られるのが、「手技帳、おさいく帳」である。

それは、教師が、一方的に計画した固定的内容を一斉指導する。形式の模倣、追従、小綺麗な小細工主義、規制の多い反復練習、外見体裁、親、教師の満足感、多数児を同時に狭い部屋で指導出来る。習慣、惰性、教師の不勉強、などが考えられる。これは、あまりにも、子どもを無視した指導である。子どもの創造性、自主性など全くない。こんな受身的な子どもにしてはいけない。

然し最近、幼稚園に貼ってある絵の中には素晴らしいのを発見する。生き生きとした絵を見た時、この園では、どんな保育が行なわれているのだろうか。と、その内容まで想像が出来るのである。保育内容が良ければ、必ず絵に現われる。その反面、子どもの心が活動していなければ、それが絵に出てくる。

特に知的教育が、中心になってくる以前の幼児期に於て、一番大切な指導は、心の教育である。物に感じる心、美しいと想う心、自然界に対する驚き、発見など、自分の感覚で促えさせることが大切だ。幼児は大人よりも感覚的な表現に鋭いものを持っている。大人は一般的な見方しか出来ないが、子どもは常識を越えた思いも及ばぬ事を言ったり、表現したりして、驚かすことがある。それは伸びるべき可能性を十分に持っている証拠である。それを、うまく引き

出すために、最もよい方法を探し出し、伸ばすのが指導であり、教師の役割であるのではないか。

子どもの発言 (川原へ遊びに行った時)

「この石、面白い形ね、鳥にも見え、人の顔にも見えるよ、いろんな色が入って美しいね、拾って帰って、ピアノの上に飾って置こうよ」

(雨上りの葉っぱの上の露が太陽の光で輝いてるのを見て)

「この葉っぱの上のお水、虹の色のように見えるよ、なぜかしらん、先生来てごらん、あんなに、きれいに光っているよ、首飾りにしたら」など……………

これらを、どのように受け止めてやるか、この感動、発見を、どう指導していくかが問題である。こんな良いチャンスを見逃さずに、教育のルールに乗せてやりたい。子どもの心を育てるために、これらの発想を発展させ、どんなものでも絵になることに気付かせたり、それを、自由に発散出来る適当な場も、与えてやりたい。又材料、用具の検討も必要だ。

然し実際には、意外と見落している。その時、その場に適した、個々に指導がなされているか疑問に思う。その日に決められた、カリキュラムの上に立って、時間通りに、コマ切れ保育が、流れている場合が多い。もっと柔軟な、保育が考えられても、よいのではないか、時には予定を変更して興味のあるものに、長時間取組ませる事も良いのではないか。

子どもの生活経験を豊かにしてやることは、それだけ深味のある絵が生れることになる。幼児の持っている特有な精神の世界を理解し、心の中に絶えず動いている創造的精神が、絵を描きながら、どんな風に表現されていくかを見守ることが大切ではないか。

#### 4. 幼児画の特色と心情画

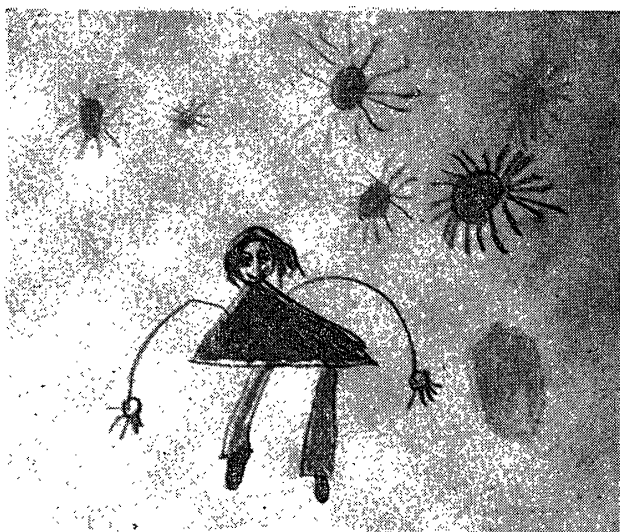
幼児の絵の特色は、自分に最も興味を感じるもの、印象の深いものを描こうとする。知識で知っているものでなく、自分の心に感じたものを、自由、自在に表現しようとする。それは未分化で幼稚だけれど、幼児自身の生活記録であり、生命そのものの表現である。全体のバランスは考えず、頭からすぐ手足が出たり、事物を単独に羅列したり、希望を誇張表現する。

写真(1) 「蟬取りに行く私」

自分を一番大きく、特に全部の手を大きく描き、蟬を沢山捕えたい気持が画面にでている。



蟬取りに行く私 (1)



遠足の思い出 (2)

## 写真(2) 「遠足の思い出」

これは芋堀りに行った時の絵である。殆んどの子供はお芋を掘っている場面を描いたのに、この子には、お芋よりも、大変暑かったという記憶が印象に残り、太陽を5、6個も描いて、その気持ちを語っている。

## 「K園の記録の中から」<sup>5)</sup>

ガス、ストーブは円筒型で3本足、火は消してあった。それを40名の子どもが描いた。それらしき形に描いたのは20名。あとは4本足、6本足など色々あり、消えた火も赤々と描いている。たずねると、「3本やとひっくり返りそうやから」「火がある方が温かいもん」と答える。

エビガニを一匹ずつ持たせて、描いたにもかかわらず、「1匹やと淋しいし、お父さん、お母さん描いてもいいか、家も描こう」と云って描いた。このように、子どもとは、見たものを実物通りに描くのではなく、自分自身の心に通して描いていく、これらを心情画と云う事ができる。そして子どもの絵には、これが非常に多く現われる。

精神衛生の面から見ると、日常の生活に、緊張や圧迫や不満があれば絵に現われる。幼児は、うっづんを絵で晴らす場合がある。

例えば

- 1) 幼稚園で、いつも、いじめられている力の強い子を、海の中に沈め、自分は、ゆうゆうと水面を泳いでいる絵。
- 2) お酒を飲んで帰ってきた父を、家の中に入れないように、家のぐるりを囲む、など……。

又、子どもが、どんどん描き始め、画面に面白く定着していく、もう、このへんで止めておけば良いのにと大人が思うても、次から次へと無中に、ぬたくって、すっかり駄目にする場合がある。又、わざと汚してしまう時もある。然し、こうせざるを得なかった気持ちを理解し子どもが満足していたら、それを認めてやりたい。そこには生活指導の要因があるので、それを補善してやる事が急務で、そうしてやる事が、健康な絵、強く明るい絵に、つらなっていく事になる。表現された絵によって、今後の指導方向を見出すひとつの手がかりとしたい。「幼児の絵は心をのぞく窓」と言われる通り、幼児の心の素直な表現に、つらなるのである。

## 5. 現代美術と幼児画

幼児画について、岡本太郎氏は次のように言っている。「子供は決して見たままを画に描きま

せん。自由に自己のうちに生きている空想の世界を描き、それに己れを投入してしまっています。ピカソの作品によく問題とされる横向きの顔に眼が2つある像があります。然しこれは決して、ピカソの発見ではなく幼児画には、しばしば見られることです。勿論人が横を向いていれば、眼は1つしか見えないのが理屈ですが、子どもは見える見えないは問題にしません。たとえ横を向いていても、人間には眼が2つあると云う事は子どもの確信なのです。建物を描くのに、裏にある入口まで表の方に描出したり、おやつを食べている絵だといって、お腹の中に、お菓子が入っているところが、外側から見えるように描いてあったりします。ポケットの上に丸が描いてあるのは、中に入っているお金なのです。

こどもは物の表面の姿などに捉われず、外部の世界が、自分に与えた感動を、自由に記憶のままに描きだすのです。何もレンズのように、一定の視角に映るものだけを、見るのが認識ではありません。

このおよそ非芸術的な常識とか、論理に災されない幼児のような表現が、現代美術に自由な新天地を開きました。無邪気さ、のんきさ、矛盾こそ、久しく人々に忘れられていた芸術の重大な要素であったのです」<sup>6)</sup>

たしかに、現代美術の一つの特色は、その根底に於て、幼児画と相通ずるものがある点である。言葉による表現が不十分な幼児の唯一の自己表現が、この描画である。

心理学者は、それを通して子どもの心を知ろうとし、芸術家は、創作への学ぶべきものを見出した。それは常に求めて得がたいものが、子どもの純直な表現の中に現われているからである。

真に偉大な画家は、出来上った技巧に禍はされず、もっと単純に魂の響をそのまま画面に表現することは出来ないかと、考えるようになってくる。

「簡素、古淡の味わいこそ芸術としての最高の境地、あらゆる虚飾を捨てた素朴な姿、真実そのものの姿<sup>7)</sup>」そう云う、ところに目を向けてくる。心が開放されて、自由な気持で描いた幼児画を見るとそこには芸術家が常に求めていた単純素朴な真実の気持と通ずるものがあるのではないか。

ここに幼児画が何故、画家達に重要視されるように、なってきたかが理解できる。

然し幼児は直観的に、自分の確信を無意識に表現するが、画家は多くの過程を経て、意識的に、そこに到達するので、一見して同じようでも、その質に於ては、大きな差がある。

幼児画は、結果よりもその過程が大切で作品はその子の排泄物と考えてもよいのではないか<sup>8)</sup> それを描く間に、その子の心が、どのように働いたかが見逃せない点であろう。

## 6. 幼稚園に於ける指導例

### 指 導 例 (1)

数、文字などを、幼児に、どのように取扱わせるか、という知的指導を重点にした公開保育

があった。その時、部屋に貼ってある絵を見て、驚くと共に、寒むぎむとしたものを感じた。それは競馬場で「走る馬」を写生したものと「柳の枝にとびつく蛙」の絵であった。両方共、技術的には、うまく、外形上は整っているが、みんな同じ型に、はまったもので、そこには、一人一人の子どもの独創性はなく、教師の一方的な指導が強く出ていて、子供不在の冷たい表現で、子どもらしい温かい感覚的なものはない。幼児期の発達段階としては技術だけが高度すぎて果してこれでよいのか。

知性指導と感性指導との関係を、どのように理解したらよいのか、絵画にも、知的要素は必要だが、それ以前に、もっと指導しておくべき大切な事があるのではないか。それは自由な素直な、心の表現ではないか。

一度「ぬたくり」など、させてみたらどうか。

子どもが知的に進んでくると、絵がつまらなくなってくる。やんちゃで乱暴な子は、生き生きとしたものを描くと云う事実がある。それは自分の発想で自由な表現をするからではないか。然し、そのままでよいのかと云うと、問題がある。そこに正しい指導が、なされなければいけない。はじめは発散的表現、感動的表現が望まれるので、最初から技術に先走ると概念画になりやすい結果となる。

### 指 導 例 (2)

自由形態がとられているこの園では、いつも自由に描かせている。課題を決めないで、各自、好きな場所で取組めるようにしている。あまり指導はしない。まさに子どもは自由、自在に、好きなことをしている。がその時の子どもの状態を見て、目の輝きがない。子どもの心が躍動しているのかと疑問に思っていると、果して、「先生、もう描いた、庭で遊んでもよいか」という声がした。

「もう少し頑張って、時計の針が、ここに来るまで描きましょう」と一つの約束で、再び描きだした。然し時計を見ながら、所定の時になると一目散にとび出した。これらの様子から、外見上の自由は決して内面上の自由とは、なっていないのではないか。そこには、教師の自由形態を貸りた放任が見られたようだ。子どもの絵は自由でなくては、いけない、それは自由な環境から生れる。一斉はよくないと言われる。その通りであるが、自由の美名の下に無頓着や放任であってはならない。そこには意欲も湧かず成長発展もない。やはり適当な方向づけや指導、助言が必要となってくるのではないか。

### 指 導 例 (3)

一つの課題のもとに、それぞれの子どもが「私のお母さん」と云うテーマで描いていた。その状態が、とても生き生きとして意欲的だし、種々の場面の母が登場している。怒っている、泣いている、料理している、化粧している美しい母など、その子の母に対するイメージと愛情が、希望となって、絵面に溢れている。長時間描いても、皆んな一生懸命で、庭で遊びたい子

供が一人も出てこない。ここまで一つの事に集中出来るのには、どのような指導がなされてきたか、そこには絵画指導の問題だけではなく、子どもが物事に取組む心構え、絵画以前の子どもの生活態度の問題である。その指導者は、急な思いつきで、おざなりに描かせているのではない。ずっと長い間「私のお母さん」と云う主題のもとで、幼稚園の全生活を流してきた。各領域より、子どもと共に考え、話し合い、工夫してきた。そして、母との関係、「大好きなお母さん」「大切なお母さん」として、時間をかけ、温ため温ためてきた。その先生の心の中には、いつかは、素晴らしいお母さんを、絵画表現させてみたいと考えてはいたが、あせって、描かそうとしなかった。

結果的に考えて、それが大変よかったようだ、絵画の出来ばえだけでなく、子どもの心の奥深く、自分で考え、自分で行動する気持を、ゆさぶり起こさせたようで、物事への取組む態度が、以前とは違ってきた。子どもの興味と関心を高め、機が熟すのを気長に待つ、指導者の気持のゆとりが大切だ。然し目標をハッキリ、つかんでいるので、漠然と待つのではなく、その間に正しい方向づけがあった。そこで始めて、よい指導と云う事が出来るのではないか。

子どもが自主活動しだせば自然と絵も良くなってくる。絵だけ良くしようと指導してもその子の本物とはならない。主客転倒である。

この園は表面的には、一斉課題であったようだが、独自の内面活動が発揮されて、感動的な作品が生れた。このように自主活動を十分にさせた指導が保育の本質ではないか。



私のお母さん (3)



色々のお母さん (4)



#### 指 導 例 (4)

この園では、一部屋を絵画製作に当て、その中で自由選択させ、各自興味のあるものに取り組ませていた。子どもの能力を、引き出させる指導をしている園では、教師の意企する中へ、子どもを引き入れようとはせず、子どもの発想を重視している。

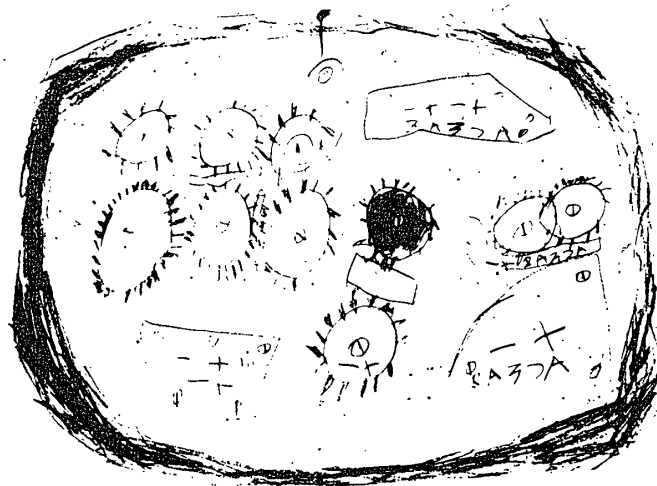
あるグループは古時計の内部構造を観察しながら、分解したり、構成したりしている。疑問点は質問している。先生は子どもと共に、観察しながら詳しく説明し、分らない時は、本を持ち出して調べている。子どもと先生とが一体となって、そこに心の通い合いと、安定感が見られる。そのあとエンピツで時計の内部を絵に描いた。



時計の内部 (5)

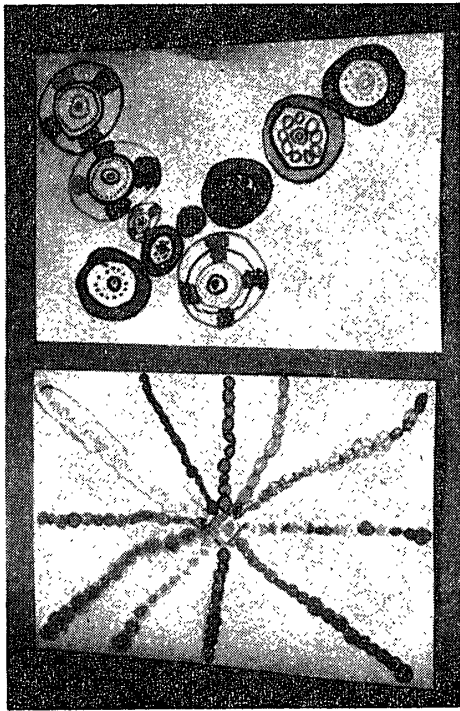


時計の内部 (6)

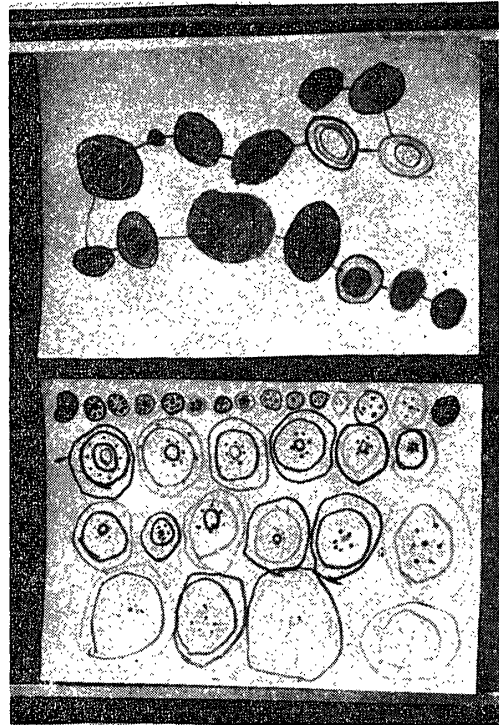


時計の観察画 (7)

上の時計の内部観察画3枚は、5才児の作品であるがどれを見ても、細かい部分まで、よく観察している。大人では到底、表現出来ない独特のよさがある。同じ丸い型の時計を見ても、それを描く子供によって様々である。ここに作者自身がにじみ出ているし、作品を見ているとそれを描いた子供が想像されそうだ。



デザイン遊び (8)



玉を並べる (9)

別のグループは、美しい玉を並べて遊んでいる。縦、横、斜、大、小、など色彩と形のデザイン遊びらしい、種々の試みを自分でして、並べてはくずし、くずしては並べる。人の模倣をする子はいない。みんなが楽しんで行なっている。最後に一番気に入ったように並べられたのを絵に描いた。

自分達が自主的に、よろこんで経験した事は、こんなに綿密に表現出来るものなのかとその観察力に驚く。これに取り組む態度がのびのびとした楽しさの中に真剣さがあった。

これらの方法は、先生の準備と努力が必要だ、時間もかかるし、費用もかかる。大変だが如何にして自発性を育てようかと、色々と試る事が大切であって、金も使わず、努力せずの園では、到底よい指導は出来ないと思う。

### 指導例 (5)

一つの絵本を中心とし、それを手がかりにして、物語りを発展させ、次々と想像力を働かせて、お話を創り、それを絵に描いている。

この園では、ここまで到達するのに一年近くかかり、それまでに大切な感覚教育がなされ、想像性が養われているので、各自が問題意識を持って、無理なく、活発に描いている。

知的な要素が相当含まれている高度な、「お話づくり」だが、絵となって展開している。子どもが一生懸命になれば、相当時間つづくものである。もう打ち切りたいと思っても止めない。その中には、お話も絵も両方共良く出来てるものやお話は上手だが、絵がそのように描けないものや、絵は上手だが、お話がそのように出来ないものや、色々ある。この場合大切なことは、お話をさせる事に目的があるので、少々絵が、うまくいかなくても、よいのではないか。

自分の描いた物語りを言語にして発表する事は、知識が相当必要となってくる。最初は言語活動を発展さす事をネライ、次に絵も両立してくれば、更に進んだ段階として、美的要素も必要となってくる。

美しい色、形、力強い表現など、より高いところを望んでの助言、指導も必要になってくる。この園のように、子どもの発達段階に適した指導が積み重ねられ、心の教育がなされているので、その上に立てば、相当高度な知的表現も自由に出来るものである事が分る。

以上は実際指導の一端ではあるが、共通して言える事は、先生のネライは何であるのか、それによって、どうしようと考えているのか、指導者如何によって、子どもは相当、影響されているし、出来上りの作品も大変違ってくるようだ。

幼児期の絵画指導は絵を上手に描かせるのが目的ではない。心の奥深いところから真実のものが出せるように、心を開放してやることである<sup>9)</sup>。それには教師の権威と抑圧をなくし、友達となり、先生は、どれほど子どもに愛情を持ち子ども達が如何に先生を信頼するか、この結びつきが解放に役立つ。

子どもは誰でも絵を描くことが大好きで、描くのが普通であり、それを描かなかったり描く気持ちを失わせたり、描けなくするのは周囲の大人に責任があるように思う。

どんな作品であっても、決して、けなさないこと、良い点を認めて励ましてやると、意欲を燃し、自信のある作品が生れてくる。

とにかく、自由になると心が活動しはじめる。自由とは、決して勝手、我儘に、ふるまうことではない。真の自由には規律も、忍耐力も努力も必要である<sup>10)</sup>。

現代の若者の言動を見ていると、自由、気儘で、自分の主張のみ叫び、他人の迷惑を考えない、礼儀、忍耐もない、これらは戦後、自由の理解と指導方法が間違っていた結果ではないか、この現実を反省して、自由の中にも筋の通ったルールが必ずあることを知らせ将来に期待される人間像を望んで、ハッキリした目標のもとに、計画を立てそれを達成するために、いつ、どこで、何をやらせるか、教えなくてはいけないこと、工夫させねば、いけない点などを、見定めていく。それには子どもを正しく理解する事が大切で、絵を通して子どもを知る、子どもを通して絵を知ること出来る。林先生も団子造形論<sup>11)</sup>で言っている。

現実の指導には全く想いつきのテーマが多い。テーマがあって子どもが、あるのではなく、そこに生きた子どもが居るから、テーマが選択されるのである。テーマとは「だんご」である。意味のない「だんご」がバラバラにあっても何の効果もない。くし、とはねらいである。あわて者の技能派は、くし、ばかり与えている。これでは栄養にはならない。むしろ害になる。「だんご」にも、あんこ、しょう油、きな粉があるように、テーマにも、それぞれのネライによって質が違ふのは当然である。要は、いくつかの「だんご」が見事に、くし、によって貫かれてこそ、「だんご」本来の姿となり、これこそ、造形的創造力や、美的よろこびを育てる力

となるのである。

子どもの心を、あづかっている以上、教師の役割は重大で責任は重いと言わねばならない。

## 7. 認識画と知性今後の課題

自主性、創造性が育てられて、自分の力で考え判断し、正しい行動の出来る人間が望まれる現在、それらは絵画表現によって育成されていく分野が多い。

現在は心情的な教育が忘れ去られている面が多い。ここに美術教育が登場してなくてはならない。絵と心との関係は深い。絵によって心情即ち人間性を育てていかねばならない。

心を通して内にあるものを呼び起しながら描く心情画や、感動そのものの、のびのびとした絵は、幼児画の生命であり、是非そうありたいし、そこには全く批判の余地はない。

然し、そのみで満足し、止まっていて、よいのか、と云うと、そうでない。次に来る指導とは何か、感動画をどう発展させていくかが大切である。何んでも子どもから発したものが凡て良いのではない。そこに本物と、そうでないものがある。子どもは外部との刺激によって、絶ず成長していく。対象物に対して積極的に反応する能動的な子どもにしたい、然し経験しない事、見たことの無いものは描けない、ここに認識画の必要が出てくる。

幼児期から豊かな物の見方が必要で、多方面からの経験を、させる事が大切である。

例えば

1. 虫の生きていく観察に於て理科的、科学的に、正確な表現をする冷たい観察は、知的な認識が主となったもの。
2. 虫の形や色のとらえ方、造形、美の追求、芸術につらなる生命感のある温かい観察は、感動が主となった認識の仕方である。

心情画と認識画とは対立するものではなく、切っても切れない関係にある。その感動が何であったのか、その奥のものを自分に問いかけて、何を見ればよいのか、どこを見ればよいのか、この観察で何を教えるのか、それによって個性を発揮してくると、最初の出合いは虫であったが、次には人と人との出会いに更に日本と外国、世界と宇宙との出合にまで結びつき、発展していくのではないだろうか。

岡田先生も述べられている<sup>12)</sup>、認識画は意識的であるし、自然、言語、社会などの他領域につづい



感動から認識へ (エビガニ) (10)

ていく、そして写実的な絵の基礎となるが、ここに警戒しなくてはいけない事は、感動のよるこびを知らないで、認識画に入ると、その絵は、きまって説明画になりがちである。前に述べ

てきた通り、絵の本命は感性表現であって知性表現でないと云う根本に、てらしても認識画は心せねばならないのは当然かも知れないが、感性活動それ自体の感動画の次に発展として、認識画を置くとすれば、認識画がまた知性活動面を大きく踏えているとすれば美術教育に於ける知性の問題が魅力となってくる。

今日の社会の教育思潮の方向でもあるから、好むと好まざるとに関せず無関心でいることは出来ない。

然し、それらの知的要素が科学的真実の遂求と成らないで、あくまで、美的真実の創造であらねばならない。それには感動に発した絵を描くことを意識化して進めるべきだと考える。かくて感性と知性が、子どもの小さい体の中で融合した作品こそ、今後の幼児画の姿ではないだろうか。ここに今後の指導の大きな課題があるのではないか。

#### 註

- |                |                                 |
|----------------|---------------------------------|
| 1) 幼児心理学       | 山下俊郎 巖松堂 29.10 p.286.           |
| 2.11) 幼年美術の研究  | 1970年度版 p.2. 1971. p.29.        |
| 3) 美術教育の理念     | 井島 勉 光生館 1969.7 p.47-48.        |
| 4) 幼稚園教育指導書絵画編 | 文部省 フレーベル館 41.5 p.3-4.          |
| 5.12) 幼年美術     | 73号月刊 1970.5 88号. 1971. 8.      |
| 6.7) 児童画の見方と指導 | 竹田, 霜田, 久保共著 金子書房 27.6 p.44.46. |
| 8) 幼児画問答       | 宮武辰夫 昭和出版 29.8                  |
| 9) こどもの絵と教育    | 北川民治 創元社 42.12 p.26.            |
| 10) 幼児の絵の見方    | 岡田 清 創元社 42.2 p.161.            |

#### 参 考 資 料

- 幼児の描画指導 芸術教育研究所編 45.3.
- 幼児のころ 岡田 清 創元社 45.8.
- 幼児絵画製作教育法 桑原, 林, 豊田, 松本編, 東京書房 44.3.1.
- 幼児の絵は生活している 宮武辰夫 27.7 栗山書房
- 幼児の感覚教育 ソビエト就学前教育研究所編 明治書房 1969.12.